

学生の介護職のイメージ

—介護福祉実習体験の違いによる意識の比較—

ツダ リエコ
津田 理恵子*

目的 介護に対する社会的イメージが悪い中で、介護福祉士養成施設における学生の定員割れは深刻な課題となっている。そこで、介護福祉士養成施設で学ぶ学生に、介護職のイメージなどについてアンケート調査を実施し、介護福祉実習経験を重ねることでその意識に差があるのか比較検討し、その結果をもとに、介護現場が抱える課題を整理することで、介護福祉士養成施設における学生への価値教育に役立てたいと考えた。

方法 調査対象は4年制大学介護福祉コースの学生81名で、2009年4月4日～4月15日の期間に、介護職のイメージや働きがい、介護福祉実習体験による介護職のイメージの変化、将来の就職希望職種などの質問紙を作成し、学年ごとに一斉に配布し自己記入方式、無記名で回答を得た。介護福祉実習経験を重ねた者による意識を比較するためにSPSS15.0を使用し、学年ごとの回答を記述統計処理し、自由記述回答は、回答内容をカテゴリー化して整理した。

結果 介護職は働きがいがあると感じているにも関わらず、介護に対するイメージは良いとはいえず、「介護の質」「人材不足」「給料面」での課題を感じていることが明確になった。介護福祉実習を重ねることで、介護現場の課題を認識したうえで、現場の表面的な大変さだけでなく、介護者としての喜びを実感し介護職を希望する学生が増える傾向があることが明確になった。

結論 専門職者として理論と実践の統合を目指した介護福祉実習では、学生が利用者との関わりから、生活支援を通して働きがいがある職種としてその喜びが実感できるよう、学生自身の成功体験を導く教授内容を展開する必要である。そして、社会における介護職のイメージ回復に向けた取り組みにより、介護のイメージの負のスパイラルは断ち切れると示した。

キーワード 介護職のイメージ、学生、介護福祉実習、実践現場の課題、養成教育

I 緒 言

介護に対するイメージが社会的に良くないイメージとしてクローズアップされたのは、2007年6月、コムスンが厚生労働省の処分を受け事業からの撤退を決定した¹⁾コムスン・ショックといわれた介護報酬不正請求事件の影響が大きい。その後、マスメディアは介護の現場について、給料が安い、仕事がつい、人手不足など、介護の現場における課題を伝えることとなった。

その影響を受け、介護に対する社会的イメージは悪くなる一方で、介護福祉士養成施設における学生の定員割れは深刻な課題となっている。

その中で、介護福祉士養成施設では2009年度から新カリキュラムでの養成が開始となり、介護の質の向上を目指している。また、介護従事者の離職率が高いなど介護の現場が抱える課題を緩和するために、2009年度の介護報酬改定（プラス3.0%）では、介護従事者の処遇改善を目指した施策が展開されている²⁾。

本学、介護福祉コースにおいても年々学生数は減少傾向を示している。入学前の説明会など

* 神戸女子大学健康福祉学部准教授

では、保護者から「介護は厳しいから」と、マイナスイメージで介護を受け止めている話を聞くことや、介護福祉コースからコース変更を希望する学生、将来介護職には就きたくないと話す学生もいる。しかし以前、介護職を辞めた経験がある106人にアンケート調査を行った結果、利用者との関係において97%の人は介護職はやりがいがあると答えており、辞めた理由として最も多かったのは、「職場の人間関係」や「スキルアップ」のためとなっていた。また、現場が抱えている課題では、「人材不足」が最も多く、「給料」「社会的に認められていない」となっていた。このように、介護職を辞めた経験がある人からは、介護職はやりがいのある職種として認識されていた。

介護福祉士養成課程における介護福祉実習は、学生の価値観を育成するうえで重要な意義があると考えている。そこで、全学年の介護福祉コースの学生に、介護職のイメージや働きがい、将来の就職希望などについてアンケート調査を実施し、介護福祉実習経験を重ねることで、その意識の差があるのか比較検討することを目的とした。そして、その結果をもとに、介護現場が抱える課題を整理し、専門職を育成していく上での価値教育に役立てたいと考えた。

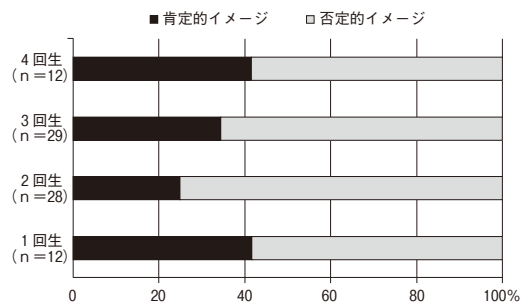
Ⅱ 方 法

調査対象は、4年制大学介護福祉コースの学生81名で、年齢は18歳から21歳で、性別は全員女性である。

調査時期は、2009年4月4日～4月15日の期間である。

調査方法は、介護職のイメージや働きがい、介護福祉実習体験による介護職のイメージの変化、介護現場の課題、将来の就職希望職種などについての質問紙を作成し、学年ごとに一斉に配布し自己記入方式、無記名で回答を得た。アンケート用紙の質問項目は、介護職のイメージについて自由記述回答を求めた。介護職は働きがいがある仕事だと感じているか、介護福祉実習を体験したイメージの変化、介護の現場で改

図1 介護職に対するイメージ



善すべき点について「とてもある」から「全くない」の4件法で質問し、その内容を具体的に自由記述で回答を求めた。そして、介護の現場が抱えていると思う課題を自由記述で回答を求め、将来の就職希望職種については、「介護職」「介護職以外の福祉職」「福祉職以外」「その他」の選択肢を設けその理由とともに回答を求めた。

倫理的配慮として、調査目的、方法、予想される損害と効果、個人情報流出する恐れがないことや、知り得た個人の情報を許可なく発表、公開、漏えい、利用しない旨について口頭により説明し、文書による同意を得た。

分析方法は、介護福祉実習経験を重ねた者による意識の比較を確認するためSPSS15.0を使用し、学年ごとに介護に対するイメージや介護職に就きたいかなどの回答について記述統計処理を行い比較検討した。自由記述回答は、回答内容をカテゴリー化して整理した。

Ⅲ 結 果

(1) 基本特性

アンケートの回収率は100%であった。1回生は介護福祉実習の経験が全くない12名、2回生は11日間の介護福祉実習を経験した28名、3回生は33日間の介護福祉実習経験をした29名、4回生は59日間の介護福祉実習経験をした12名となっていた。

(2) 介護職のイメージ

介護職に対するイメージを一言で答えてくださいと自由記述回答を求めた結果(図1), 1回生と4回生では肯定的なイメージの回答が41.7%で否定的なイメージの回答が58.3%となっており, 2回生は肯定的なイメージの回答が25%, 3回生では34.5%となっていた。1回生と4回生では, 肯定的なイメージの回答で最も多かったのが「人のためになる」で, 2回生では「やりがいがある」, 3回生は「喜びが多い」となっており, 否定的なイメージで最も多かった回答は, 1~4回生ともに「心身ともに大変」となっていた。

一方で, 介護福祉実習を体験したことで介護職のイメージに変化があったかという問いでは, 「まあまあある」と「とてもある」と答えた者が, 2回生では53.6%で, 3回生は89.7%, 4回生が83.3%となっていた(図2)。

介護福祉実習体験により介護職のイメージとして変化した内容を自由記述回答により回答を得た結果(図3), 肯定的なイメージの内容に

変化した者は2回生では10.7%, 3回生は25%, 4回生が43%となっていた。肯定的なイメージに変化した内容で最も多かったのは, すべての学年で「やりがいを感じた」となっており, 否定的なイメージに変化した内容ではすべての学年で「心身ともに大変だと感じた」となっており, その他の内容では「介護の質が低い」「技術が難しい」「耐えることが多い」「利用者向き合う時間がない」などとなっていた。

(3) 働きがい

介護職は働きがいがある職種だと感じているかという問いでは, すべての学年で「とてもある」「まあまあある」と答えており(図4), その理由を自由記述の回答でみると, すべての学年において「役に立ち人に喜んでもらえる」と答えていた者が最も多く, その他の回答には「やりがいを感じる」「人間として成長できる」「関わりで変化が実感できる」「責任がある」があった。

図2 介護福祉実習体験による介護職のイメージの変化

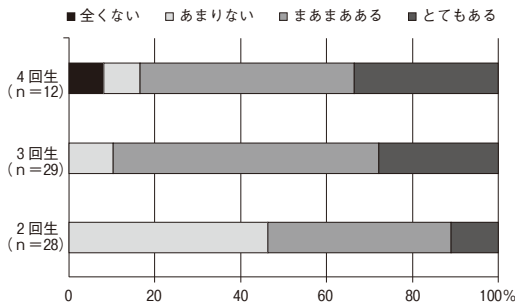


図3 介護福祉実習体験により変化したイメージの内容 (重複回答あり)

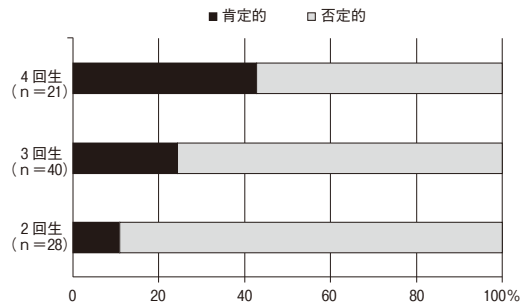


図4 介護職の働きがいの有無

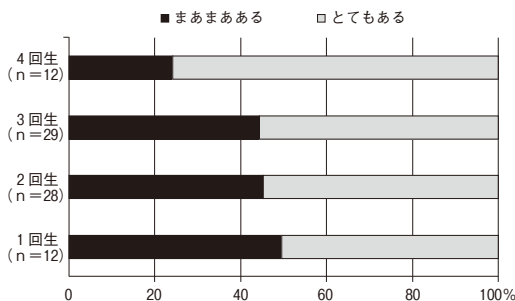
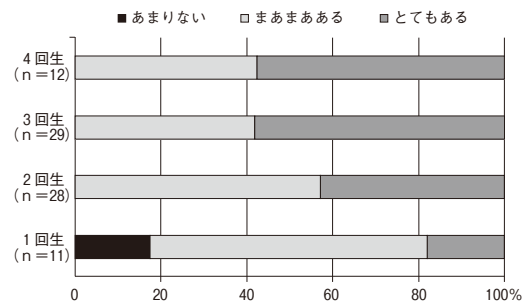


図5 介護の現場で改善すべき点の有無



(4) 介護現場で改善すべき点

介護現場で改善するべき点があるかという問い(図5)では、2回生～4回生では「とてもある」「まあまあある」とすべての学生が答えており、「あまりない」と答えていたのは、1回生のみであった。介護現場で改善するべき内容を自由記述回答の結果でみると、2回生～4回生では「介護の質の低さ」が最も多く、その他の内容には「給料」「人材不足」「施設の経営方針」「あきらめている姿勢」「社会の悪いイメージ」「施設内教育」となっていた。

(5) 介護職が意欲的に働き続けるための改善策

介護職が意欲的に働き続けるにはどのような改善策が必要だと思うか自由記述で回答を得た結果、すべての学年において「給料アップ」してほしいと答えていた者が最も多く、その他の内容には「ケアの質の改善」「人員確保」「制度・政策の見直し」「社会的イメージの回復」「休日の確保」「介護者へのケア」「施設内教育の実施」「職員の人間関係の改善」があった。

(6) 将来の就職希望職種

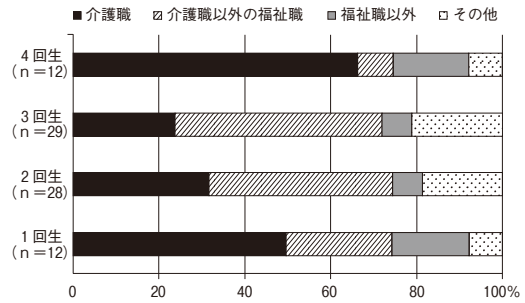
将来の就職希望職種(図6)では、2回生と3回生では「介護職以外の福祉職」と答えた者が最も多く、1回生と4回生では「介護職」が最も多かった。介護職に就きたいと答えていた者の理由を自由記述で回答を得た結果、1回生では「ボランティア経験を通して」、2回生では「介護が好き」、3回生では「介護が好き」と「やりがいがある」、4回生では「やりがいがある」と答えていた者が最も多かった。一方、介護職以外を希望している者の理由では、2回生では「悩んでいる」と「給料が安すぎる」、3回生は「悩んでいる」と答えた者が最も多く、1回生と4回生では「他にしたいことがある」「悩んでいる」などの回答があった。

Ⅳ 考 察

(1) 介護職のイメージと働きがい

介護職に対するイメージでは、すべての学年

図6 将来の希望職種



において肯定的なイメージよりも否定的なマイナスイメージを抱えていることが明確になった。その一方で、介護職は働きがいがある職種だと感じていることも明らかになった。

学生は介護職のイメージとして、心身ともに大変なマイナスイメージを抱えているが、人の役に立ちやりがいのある中で、自己の成長を促してくれる職種として認識している者が多いことが明らかになった。また、介護の実践現場での実習体験がない入学直後の1回生においても、介護職に対して否定的なイメージを抱えている者が半数以上を占めていたことは、実際の体験を通じたイメージではなく、社会の中での介護職に対するイメージとして答えている者が多いのではないかと考えられた。

介護福祉実習体験による介護職のイメージの変化においては、2回生で約半数の者が変化したと答え、3回生と4回生では80%以上の学生が変化したと答えていた。その内容では、否定的なイメージに変化した者が多く、肯定的な変化では「やりがいを感じた」が多く、否定的な変化では「心身ともに大変だと感じた」「介護の質が低い」「耐えることが多い」「利用者向き合う時間がない」となっていた。しかし、学年ごとにみると、肯定的なイメージに変化したのは4回生、3回生、2回生の順にその割合が高かった。

本学では、介護過程の展開を体験する介護福祉実習を、3回生の春休みに実施している。2回生と3回生は介護福祉実習体験において、介護過程を展開するプロセスを体験しておらず、

専門職者として利用者への生活支援を実践する過程で得られる介護者としての喜びを実感していないことが原因の1つとして考えられた。一方、4回生は、介護過程を展開するプロセスを通して、利用者個別の生活ニーズを抽出し、個別に応じた介護を実践していくため、利用者への関わりを通して介護福祉士の専門職者としての喜びを実感することが多い。そのため、4回生では、利用者との関係性の中から介護職のイメージが肯定的なイメージに変化していると捉えることができた。

これらのことから、介護福祉実習体験を重ねることで学生は、自己の関わりから利用者の変化を実感し、介護者としての喜びを実感できる者が多いことが推察でき、介護福祉実習体験が短い学年では、介護職はやりがいがある職種だと意識しながらも、表面的な大変さを実感した状態で実習を終えていると捉えることができた。

(2) 介護現場の課題

2006年度に介護労働センターが調査した介護労働者の就業実態と就業意識調査³⁾における前職を辞めた理由では、「賃金労働時間に不満」と答えた者が、「自分の家族の事情」に次いで多く27.2%を占めていた。また、2008年12月～2009年3月にかけて実施した介護職を辞めた経験がある106人にアンケート調査を行った結果では、利用者との関係において97%の人は介護職はやりがいがあると答えており、辞めた理由として最も多かったのは「職場の人間関係」や「スキルアップ」のためとなっていた。また、現場が抱えていると考える課題では、「人材不足」が最も多く、「給料」「社会的に認めてもらえていない」となっていた。

本調査においても介護福祉実習体験を経験していない学生よりも実習を体験した学生は、「介護の質」「人材不足」「給料面」「社会的イメージ」「介護職員へのケア」などでの課題をより意識し、これらの課題を改善していくことが必要であると答えていた。また、入学して間がない1回生においても、介護の現場が抱えている課題について「人材不足」「給料面」をあ

げていた。このことは、介護の実践現場の労働環境の悪さなどが、マスメディアでも取り上げられることが多く、介護の専門職者を目指す学生にとっては、マイナスイメージを助長させる要因になっているのではないかと思われた。

(3) 将来の就職希望職種

1回生では、介護福祉実習を全く経験しておらず、ボランティア経験を通して感動したことが入学理由でもあることが介護職に就きたい理由として考えられた。そして、介護福祉実習体験を重ねていく中で、「介護が好き」という理由から「やりがいがある」という理由に変化しており、介護福祉実習において介護者としての喜びを実感したうえで介護職を希望する傾向があると捉えることができた。

さらに、4回生のアンケート自由記述回答欄には、介護福祉士養成課程における最後の介護福祉実習を体験する以前には、介護職には就かないと話していた学生から、「大変だと思っていたが、それ以上にやりがいがあると感じることができた」や「利用者との関わりで充実した実習が行えた」などの感想が記載されており、介護福祉実習体験における学生の成功体験が、介護職を選択する自信を引き出していることと捉えることができた。

しかし一方で、介護職以外を希望している者の理由では、「悩んでいる」と答えた者が最も多かった。理由として、介護職は働きがいがある職種だと認識していても、実践現場が抱える課題を踏まえると介護職に就きたいと思えるほどの理由が存在していないことが推測できた。そのため、介護福祉士養成課程では、介護福祉士として価値観育成に重要な意義をもつ介護福祉実習において、介護者としての喜びや成功体験が実感できるよう導いていくことが重要であると捉えることができた。

(4) 負のスパイラル

介護福祉士養成施設で介護福祉士の資格取得を目指す学生は、介護職は働きがいがあると感じているにも関わらず、介護に対するイメージ

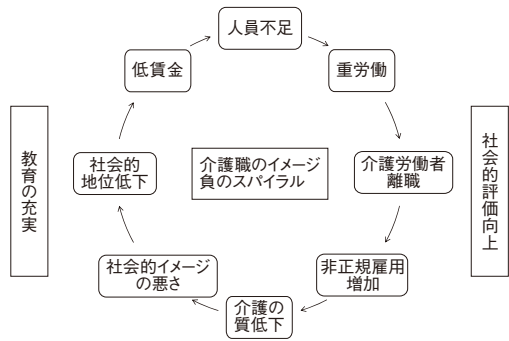
は良いとはいえ、「介護の質」「人材不足」「給料面」での課題を感じていることが明らかになった。しかし、社会的には介護職に対するイメージが良くない中で、介護福祉実習を重ねることで、現場の表面的な大変さだけでなく、介護者としての喜びを感じることができた場合、介護職を希望する学生が増える傾向があることが明らかになった。

このことから、介護福祉士養成教育の現場では、養成期間中に、専門職者としての価値・倫理が身に付くよう導くとともに、介護者としての喜びが実感できるよう教授方法を検討していくことが重要といえる。とくに、専門職者として理論と実践の統合を目指した介護福祉実習では、学生が利用者との関わりから喜びが実感でき、学生自身の成功体験が得られるよう、実習環境を調整するなど、学生にとって学びやすい環境が提供できるよう工夫していくことが必要といえる。

そして、利用者の生活支援を通して介護職は働きがいがある職種として、社会的にも認知されるよう働きかけていくことが必要といえる。このように、教育内容の充実と社会的イメージの回復を目指した取り組みにより、介護職のイメージの負のスパイラル（図7）を断ち切ることが可能になっていく。さらに、福祉職を辞めた経験がある者の離職理由を考慮すると、職場の人間関係を円滑にしていくための施設内研修や卒後教育、スーパービジョンの導入など施設管理者を巻き込んだ意識改革などの検討も行っていくことが必要といえる。

介護職のイメージの負のスパイラルとは、現状での社会的イメージの悪さから、社会的地位が低いなか、低賃金、人員不足を引き起こし、介護労働者の離職に拍車をかけ、非正規雇用労働者の増加に伴い、介護の質の低下を招くとい

図7 介護のイメージにおける負のスパイラル



う悪循環である。このような悪循環を良い循環に転換し、介護の実践現場が整備された労働環境になっていくことで、ケアの質の向上も図れ、利用者にとっても個別に応じた生活支援を受けることが可能になり、介護福祉士の専門性も向上していくといえる。

また、今回調査対象となった学生は、4年間をかけてソーシャルワークの知識や技術を学び、さらに介護福祉士として必要な知識や技術を身につけている。介護実践の現場が社会福祉領域であることを考慮すると、実践現場が抱える多くの課題解決に向けて、広い視野から深く考察できる人材育成を目指していくことが、現在の多様な福祉ニーズに対応していくための重要な視点ともいえる。

文 献

- 1) コムソンの事業譲渡完了。朝日新聞記事。2007；12.1.
- 2) 社会保障審議会介護給付費分科会第58回議事録。老健局老人保健課。2008.
- 3) 平成18年度介護労働者の就業実態と就業意識調査。介護労働センター。2007.